

第27回バイオメディカル研究所 インタラクティブセミナー特別版

HIV感染症治療とパンデミック制御 ～感染症基礎学術研究の果たす役割～



国立大学法人 東京科学大学
大学院医歯学総合研究科
ハイリスク感染症研究マネジメント学
教授
武内 寛明 先生

学内専用申込フォーム 2025年11月19日締切
<https://forms.gle/LgjkjJpNwhGDM4oWA>
右のQRコードからもアクセスできます



2025年**11**月**20**日（木） 16:00～17:00

ハイブリッド開催 <会 場> 農学部 23番講義室
<WEB> Zoom

対象は全ての教職員・研究者・大学院生です。皆様のご参加をお待ちしております。

HIV感染症治癒とパンデミック制御 ～感染症基礎学術研究の果たす役割～

国立大学法人東京科学大学（Science Tokyo）

大学院医歯学総合研究科 ハイリスク感染症研究マネジメント学 教授

武内 寛明

病原体と宿主が織りなす感染現象は、病原体因子と宿主因子との機能的均衡により成り立っており、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）による感染現象も例外ではない。HIVを病原体とするHIV感染症は世界三大感染症の一つであり、HIVは免疫応答の維持に必須のCD4陽性T細胞を主要な標的細胞として感染し後天性免疫不全症候群（AIDS）を引き起こすウイルス病原体である。HIV感染症が世界に出現して40年が経過した今、抗レトロウイルス療法（ART）の進歩により、HIV感染者は治療を続ける限り非感染者とほぼ同等のQOL（quality of life）と平均余命を持つまでになった。しかしながら、ARTはHIV感染増殖伝播環境下においてのみ有効であり、HIV治癒への大きな障壁となっているHIV潜伏感染細胞集団（潜伏HIVリザーバー）を体内から排除する方法として必ずしも効果的ではないことが明らかとなっている。これらのことから、HIV感染症の根治を達成するためにはまだまだ多くの課題が残されている。

またグローバル感染症に目を向けると、COVID-19パンデミックは、本邦においては5類感染症への移行に伴い対策は大きな節目を迎えたが、様々な要因により発生が予想される新興・再興感染症による次なるパンデミックの影が忍び寄りつつあることも認識することが肝要である。そのためには、原因不明病原体による感染事例が起こった際に、速やかに病原体の特徴を捉えて迅速な感染症対応につなげるための初動体制構築が必要不可欠である。

本セミナーでは、（１）HIVと宿主（細胞因子群）とのせめぎあい、（２）HIV根治に向けたHIV潜伏感染維持再活性化相克の分子メカニズム、に焦点を当てた我々の基礎学術研究成果を紹介させていただき、さらには、（３）病原体形状予測技術（病原体モンタージュ技術）開発、の経緯に至るまで、感染症に強い社会を作るために基礎学術研究が果たす役割についてお話しさせていただきたい。